

島嶼観光フィールドワーク ・マナアイランドリゾート

国際地域学部国際観光学科3年

榎本 紗季

私たちが所属する井上研究室では、観光事業経営について学んでいます。観光という無限の可能性を、いかにマネージメントして収益を生み出していくか、この課題に対してゼミ生全員で取り組んでいます。これまでの研究では、観光資源の活用やサービスの収益化について、グループに分かれて考察してきました。実際に現地へ赴くことも多く、これまでに板倉町の標識や伊香保温泉街の現状について調査してきました。特に伊香保温泉では、観光ガイドの生の声を聞くことができ

大変刺激的でした。井上ゼミのビッグイベントとして、フィジーのマナ島のフィールドワークがあります。2006年は9月25日から10月2日にかけて行われました。現地で働く総支配人、従業員、そして観光客にインタビューしながら、観光と環境の問題、リゾート運営、マーケティングについて学びました。オーストラリアの東に位置するフィジーは、1970年に英連邦の自治国として独立。その後、1987年に英連邦からも離脱し、フィジー共和国として

家族のような温かさ

環境問題も理解深める

現在に至っています。観光を主産業とする360以上の島から成る島嶼国家で、中でもマナアイランドは、珊瑚に囲まれた美しいリゾート、日本人にも大変人気があります。フィジーの玄関・ナンディ国際空港から水上飛行機やヘリコプターで15分ほどの所にあります。この島に設立されたマナアイランドリゾートの特徴は、フィジーのリゾートホテルとしては最大級の規模を誇りながら「地と血のつながり」を大切にしていること。総支配人の田中正夫さんをいわば村長として、ここで働く従業員たち全員が大家族の一員としての絆と愛情、協力の精神を持っています。この精神が家族のような温かさでゲストを迎えるサービスにも生かされています。フィジーに着くと「おかえり」、帰る際には「行ってらっしゃい」、また戻っておいで」と家族のように温かく声をかけてくれます。従業員は必ず笑顔であいさつし、頼んだことは親身



現地で知り合った日本人観光客の人たちとスキューバダイビング



マナアイランドリゾートのコテージ。海まで約1分

にしっかりとやってくれます。ルームメイキングの際には、うれしいことに花をきれいに飾ってくれる。フレンドリーでとても気さくです。このやさしさと心配りが、ゲストを充実した豊かな気分させてくれるのです。そしてホテルでは、すべてがサインと部屋番号の記入のみでOK。お金を持ち歩かなくてすむので盗難の心配もありません。

もともと人と争ったり、競うことのないフィジーでは、人々はゆったり、のんびりしています。急がない、あわてない、走らない。電話が鳴っていても誰人走らない。ゆっくりですが仕事は確実にこなし、ミスもあまりない。このスタイルに慣れるまで、時間がかかる人もいますが、時間がかかるといっても心地的に「癒やし」となるのです。

車も観光客の荷物を運ぶトラック以外は、バギーがあるのみ。こみも細かく瓶、紙、生ゴミ等に仕分けられ、処理されています。シュノーケリング、スキューバダイビング、バナナボート、パラセーリングなどアクティビティも充実しています。海の世界はカラフルで、珊瑚礁にたくさん種類の魚たちがそれぞれ群れを成しています。クマノミ、ウミガメ、タコ、さらに2匹を優に超える舟も見ることができました。ビンゴゲームをしたり、民族衣装に着替えたり、木の葉から帽子やかばんを作ったりとイベントも盛りだくさん。これらのアクティビティやイベントを通して、マナの美しさと素晴らしいことを知り、さらに珊瑚礁の破壊といった環境問題についても理解を深めていくことができます。

フィジーでの経験を今後の活動にも役立てたいと思っています。国内でフィールドワークを展開し、フィジーで培ったことを生かしながら、観光事業についての研究を深めていきます。



8人乗りの小型機でマナ島に上陸(前列右から2人目が榎本さん)

東洋大板倉キャンパス

田園の学舎 ●●●●●

発

～第3部 X